

エゾスジグロシロチョウとスジグロシロチョウ、エゾヒメシロチョウとヒメシロチョウ、ウスバシロチョウとヒメウスバシロチョウ、ミドリシジミ類、ヒョウモンチョウの調査が不完全で今後の課題となっているし、食草（樹）との関係も明らかにしたい。円子氏との共同作業にして行きたいと思っている。（浦幌町立浦幌中学校教諭）

参考文献

- ①白水 隆『原色図鑑日本の蝶』
- ②白水 隆『標準原色図鑑全集Ⅰ 蝶・蛾』
- ③高橋 昭・他『カラー自然ガイド日本の蝶Ⅰ』
- ④高橋 昭・他『カラー自然ガイド日本の蝶Ⅱ』
- ⑤藤岡知夫『図説日本の蝶』
- ⑥横山光夫『原色日本蝶類図鑑』
- ⑦藤岡知夫・他『カラー続日本の蝶』
- ⑧藤岡知夫・他『カラー日本の蝶』
- ⑨十勝教育研究所『十勝学習資料集』No.1
- ⑩足寄町立旭丘小中学校『環境を生かした理科指導——昆虫教材の活用と実践——』
- ⑪円子紳一「浦幌町の蝶類レポートⅠ」(『浦幌町郷土博物館報告』2) 1973
- ⑫田中 肇『カラー自然ガイド 花と昆虫』
- ⑬朝日新聞社『北方植物園』
- ⑭本田正次・他『原色植物百科図鑑』

註

註1 1969～1971年に岡山県下で亜種が発見されている。

註2 本道でも、札幌を中心には生息していた。テングチョウは絶滅し、札幌市八軒山附近に残存していたオオムラサキも、近年その姿を見ることがないという。乱獲と食樹であるエゾエノキの減少によるものであろう。十勝においても上士幌および音更に知られるカラフトルリシジミが、道路建設にともなう植生の変化から絶滅の恐れがあるとされている。

註3 石狩低地帯はクリ（ブナ科）・トチノキ（トチノキ科）等の北限であり、黒松内低地帯はブナ（ブナ科）の北限として知られている。

註4 円子紳一氏が1972年10月17日に常富で採集されたもの、釧路地方でも記録がある。迷蝶とは本来その地方に生息して発生をくりかえすものではなく、たまたま、その地方に移動してきたか、一回発生して死滅する蝶をいう。極めて珍らしい例として1972年来、利尻島で発見されたアサギマダラがある。この蝶は本来、南方系の蝶で、北海道でも渡島半島に見られるのみだが、離島である利尻になぜ見られるのかわからない。

浦幌新吉野台細石器遺跡出土の遺物

後藤秀彦・佐藤訓敏

I 遺跡の位置と地形 (Map 1—7)

浦幌新吉野台細石器遺跡は北海道十勝郡浦幌町字共栄 127・128番地に所在する。遺跡は吉野台地の南端近く東側の標高15m、比高5mのところにあり、東側眼下には浦幌川に注ぐ小溪ピパウシリ川が北から南へ流れている。遺跡は現在造林地となっているが土地所有者飯山伝平氏によって丁寧な保存施設が行なわれている。吉野台地上には、Map 1 に示したように縄文早期に比定しうる遺跡が軒を並べ、台地全体がさながら一大遺跡のようであり、この他にも2～3のこの時期の遺跡の存在が知られている。

(後藤)

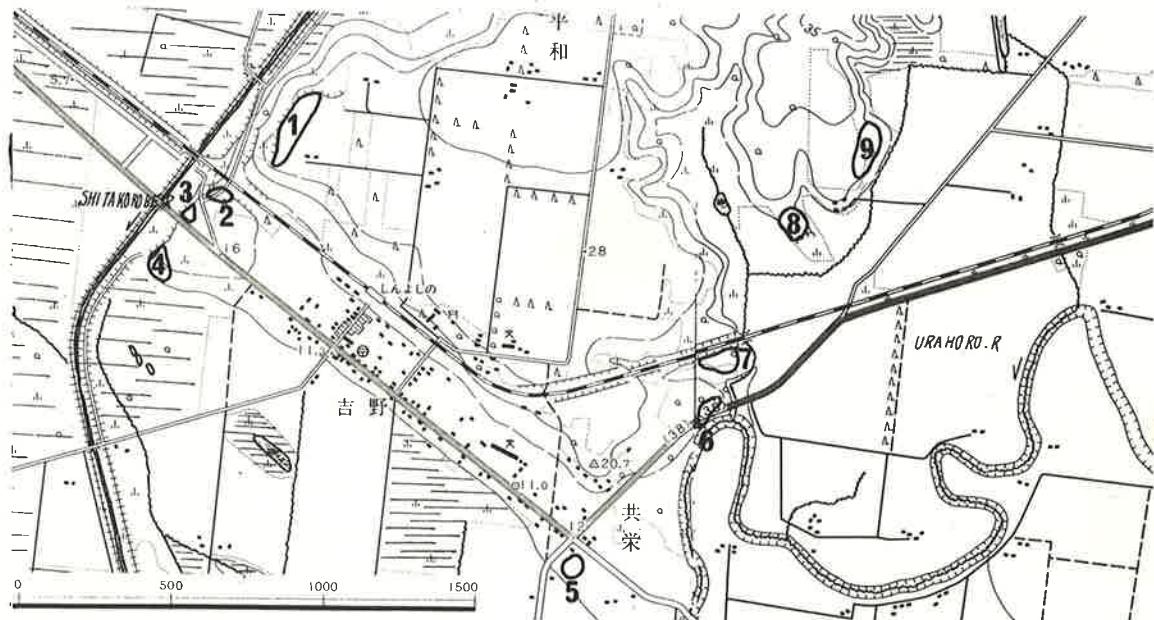
II 出土した土器について (Fig. 1、Fig. 2)

出土した土器片の数は多いものではない。しかしバラエティーに富んでおりその諸特徴から概ね次の3群に分類が可能であると思われる。

第I群 (Fig. 1—1～5)

貝殻条痕文および無文の土器群である。これらは各々の特徴から2類に分類できる。

第1類 貝殻条痕文が横位に施文されたグループ Fig. 1—1～3 がこれにあたる。1は貝殻条痕文を表裏にもつが特に裏面に顕著である。口縁部外縁はヘラ状のものでそいだように口唇は尖がり気味である。3は2にくらべ条痕文が深く施されて



Map 1 浦幌新吉野台細石器遺跡附近の地形および主要遺跡（1：平和遺跡 2：下頃辺遺跡 3：吉野遺跡 4：新吉野遺跡 5：共栄遺跡D地点 6：共栄遺跡C地点 7：浦幌新吉野台細石器遺跡 8：共栄遺跡B地点 9：共栄遺跡A地点）

いる。

第2類 無文のグループである。Fig. 1—4～5がこれである。5の口唇は1と同様の作りである。4は、無文であるが裏面にヘラによる整調痕が明確に残されている。

第II群 (Fig. 1—6～9)

絡条体圧痕文を主文様としているグループである。これは次の2類に細別できる。

第1類 絡条体圧痕文が単独にかつ直線的にのみ施文されているもので、Fig. 1—6・8・9がこれにあたる。6は細かな絡条体圧痕文を横位に並列している小形の土器で更にこの絡条体圧痕文に直角（口縁部から底部方向に向かって）極めて繊細な微隆起線を配している。8は底部附近の破片である。厚い器壁をもち極く繊細な絡条体圧痕文が太目に施されている。9は6と同様に横位に絡条体圧痕文が施されている。

第2類 絡条体圧痕文が横位乃至斜位に複合施文されているものでFig. 1—7がこれである。裏面並びに表面には貝殻条痕文が顕著で口縁部上方から見た形状は直線をなしている。

第III群 (Fig. 1—10～14, Fig. 2)

撚糸圧痕文・短縄文・縄文・隆起帯を単独乃至複合施文しているグループ。

第1類 縄文・短縄文が単独乃至複合して施文さ

れているものでFig. 1—10・11・13・14がこれにあたる。

第2類 撥糸圧痕文・縄文を基調として縦位乃至横位に隆起帯の施されるもの。Fig. 1—12・Fig 2がこれに当る。Fig. 2は口唇は平坦で1対の丸味を帯びた山形隆起をもち縦位および横位にベルト状の隆起帯がある。

（後藤）

III 出土した石器について (Fig. 3, Fig. 4)

石刃 (Fig. 3—1～16, 18～20)

石刃石核から剥離された完形を石器として利用しているものと、折損した石刃あるいは石核整形・石刃整形の剝片としたものがある。1は二次加工が顕著に見られ、更に図右側縁部が磨耗している。2～4・8・9と11は側縁に二次加工が施されたり、磨耗の見られるものである。特に4は図左側縁部に刃つぶしのノッチが施されている。

石刃鎌 (Fig. 3—17)

二稜三剝離面をもった幅・厚さとも均一な石刃を素材に打瘤を先端部にした石刃鎌で、その一般的な特徴である押圧剝離による調整加工が、主剝離面の両側縁に施されている。基部は平坦、表面からの細かな剝離が見られる。しかも石刃鎌作出の後に右肩から加撃されたシングル・ブローの彫刻刀面を作出しているが、偶発的なものであろう

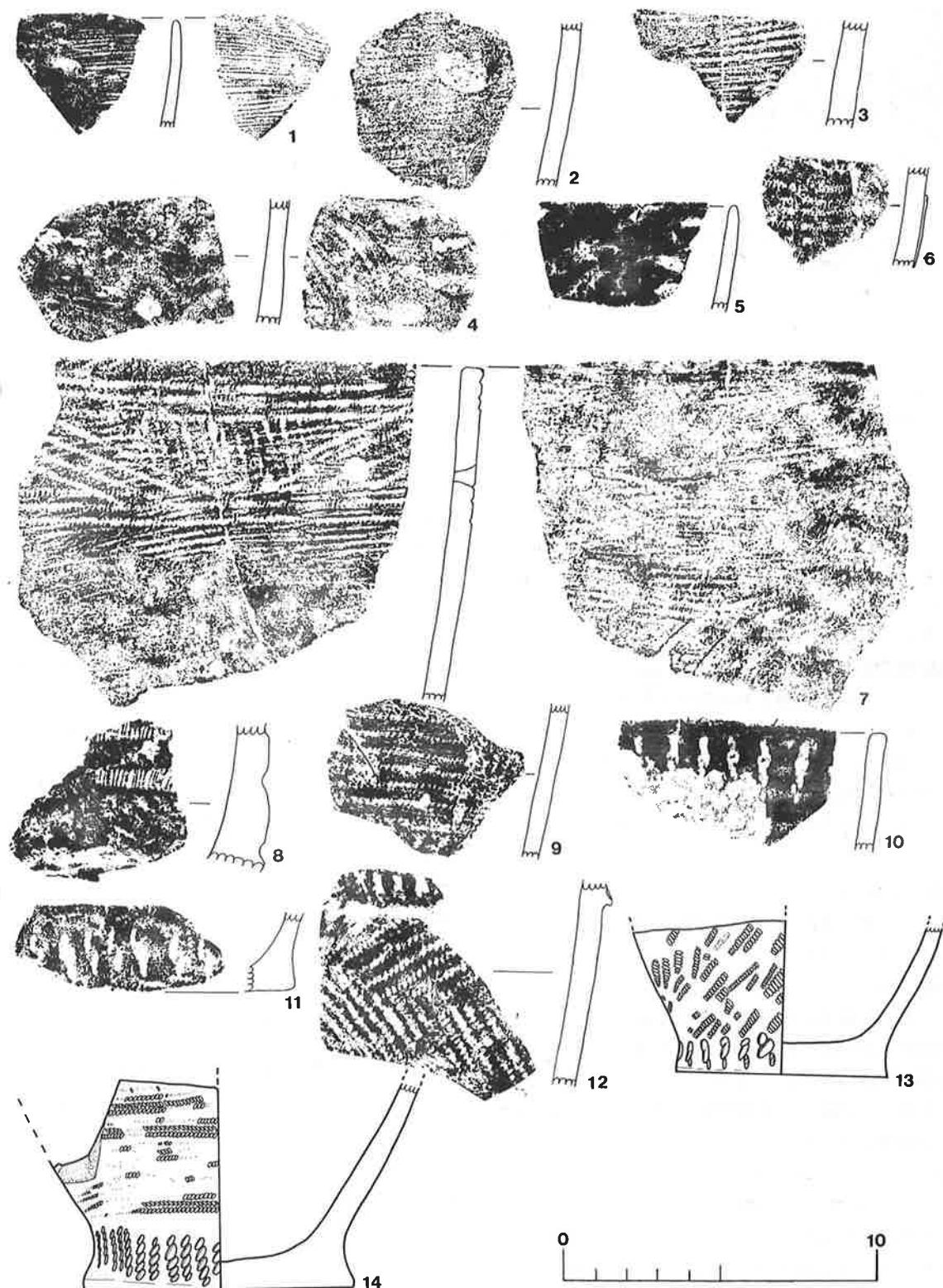


Fig. 1 浦幌新吉野台細石器遺跡出土の土器 (I)

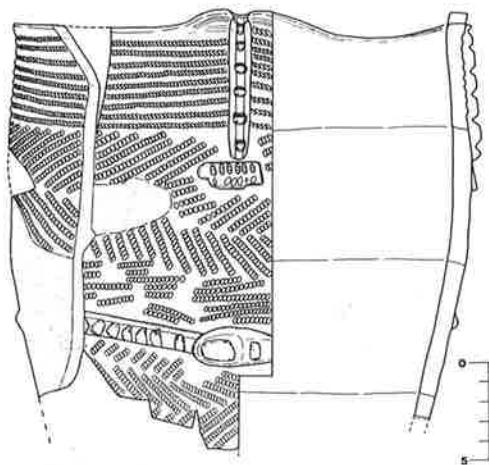


Fig. 2 浦幌新吉野台細石器遺跡出土の土器(Ⅱ)か。特殊なタイプである。

スクレイパー類 (Fig. 3-21・22)

21は剝片を素材とし、図右側縁部に入念な二次加工が施されている。22はいわゆる縦長石匙と言われる仲間である。柄部と考えられる裏面（主剝離面）に加工を施し、平坦に作出している。図右側縁部ほぼ全体に磨耗が見られ、図左側縁の先端部近くにも磨耗が見られる。

磨製石斧類 (Fig. 3-23~28)

23・24は擦切磨製石斧製作結果の残痕ともいいうべきもので25もそれに近いものである。26は両面から穿孔された有孔磨製石斧。28は刃部を失っており図右側縁および折損された部分が加撃を受けている。同様のものは^{註1}帯広市八千代遺跡からも出土している。

砥石 (Fig. 3-29)

平坦な面に幅0.2mmから0.4mmの細長い溝が平行に2本走っている。

石錐 (Fig. 3-30・31、Fig. 4-33)

いずれも扁平な円盤に打欠きを入れたもの。30は短軸。31・33は長軸に打欠きが見られる。

敲石 (Fig. 3-32)

非常に形の整った石を利用、現存している一端に打撃痕を残している。

石核 (Fig. 4-34~40)

それぞれ円錐形の形態を呈し、打面と剝離のなす角度はほぼ直角である。いずれも調整打面が見られ、その形は長方形である。なお39・40は石核の一部分を残しているものである。38の側縁部に二次の調整加工を残しているほかは、ほぼ全周に

石刃の剝離痕が見られる。

(佐藤)

IV. 考察

土器は3群に分類された。いずれも縄文早期に比定されるべきと思われる。第Ⅰ群は沼尻式の仲間、第Ⅱ群は浦幌式の仲間、第Ⅲ群は東釧路Ⅲ式の仲間と考えている。この中でFig. 1-8に示した土器片は底部近くに繊細な絡条体圧痕文をもつていて、浦幌式の仲間でこうした例は他では聞いていない。底部附近に大柄な絡条体圧痕文が施さる例は平和遺跡でも知られているところであるが、その施文原体に根本的差があるようである。またⅢ群としたFig. 2の土器も特異である。一応東釧路Ⅲ式としたが、コッタロ式との関連を吟味する必要があろう。あるいはこうした土器を介在してコッタロ式に移項するのかもしれない。

石器は、8器種を描出することができた。これらは前述した土器群のいずれかに伴出するものと思われるが、表採資料であり絶対的な根拠に欠けている。しかし石器自体を見ると縄文早期に普遍的に見られるものと、そうでないある特定の土器のみに伴出しないものとに分かたれ、本遺跡においては後者が石刃鎌文化期に帰属され、石刃・石刃鎌・石核・磨製石斧の一部(23-25)などが該当するものと思われる。その他については直接的に伴出関係を論じる根拠は全くない。

次に、本遺跡出土の石刃鎌文化期の石器組成について概観すると、既に斎藤米太郎氏^②および名取武光氏^③の報告によれば石刃・石刃鎌・石核・磨製・打製石斧・石錐・石錐・播・削器類・尖頭器・環飾・彫器・削片などが一般的な組成といえ、それらは浦幌式とともにPit内より出土している。これら石器の組成・特徴より、同一文化期における2つの階梯のうち新しい段階に位置するものと思う。が、石器の組成等の現象のみに捕われることなく、石刃鎌文化期に編年される土器群との不可分の連関を、石刃鎌文化期の周辺大陸からの波及^④そして北海道における受容・浸透の仕方、更には在来土着の文化との関わりあい等全体として発展的に捉えていかねばならない。(後藤・佐藤)

(浦幌町郷土博物館・立正大学文学部学生)

註1 本資料は明石博志氏よりご教示・実見する。曉式土器に伴う可能性があるという。

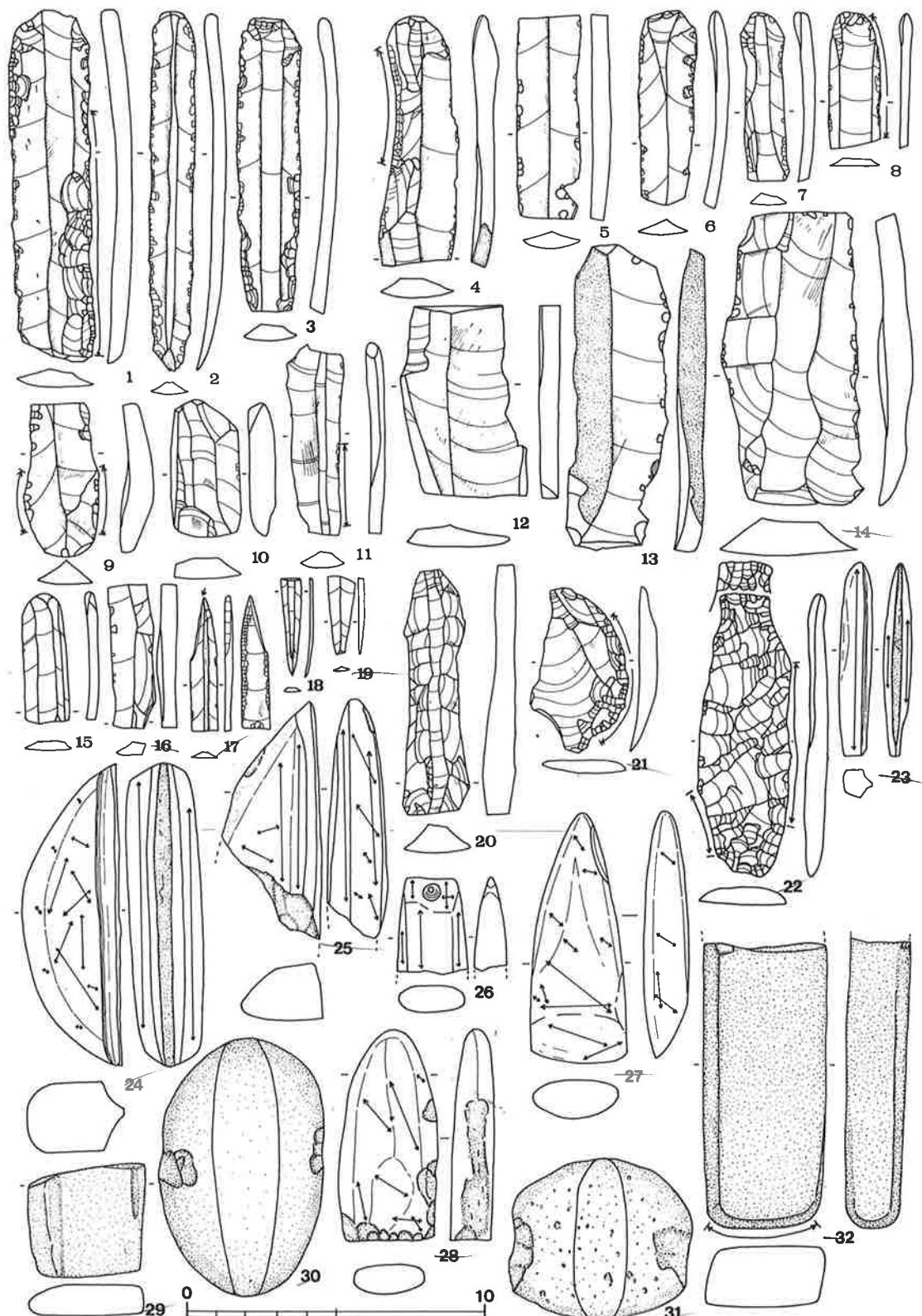


Fig. 3 浦幌新吉野台細石器遺跡出土の石器 (I)

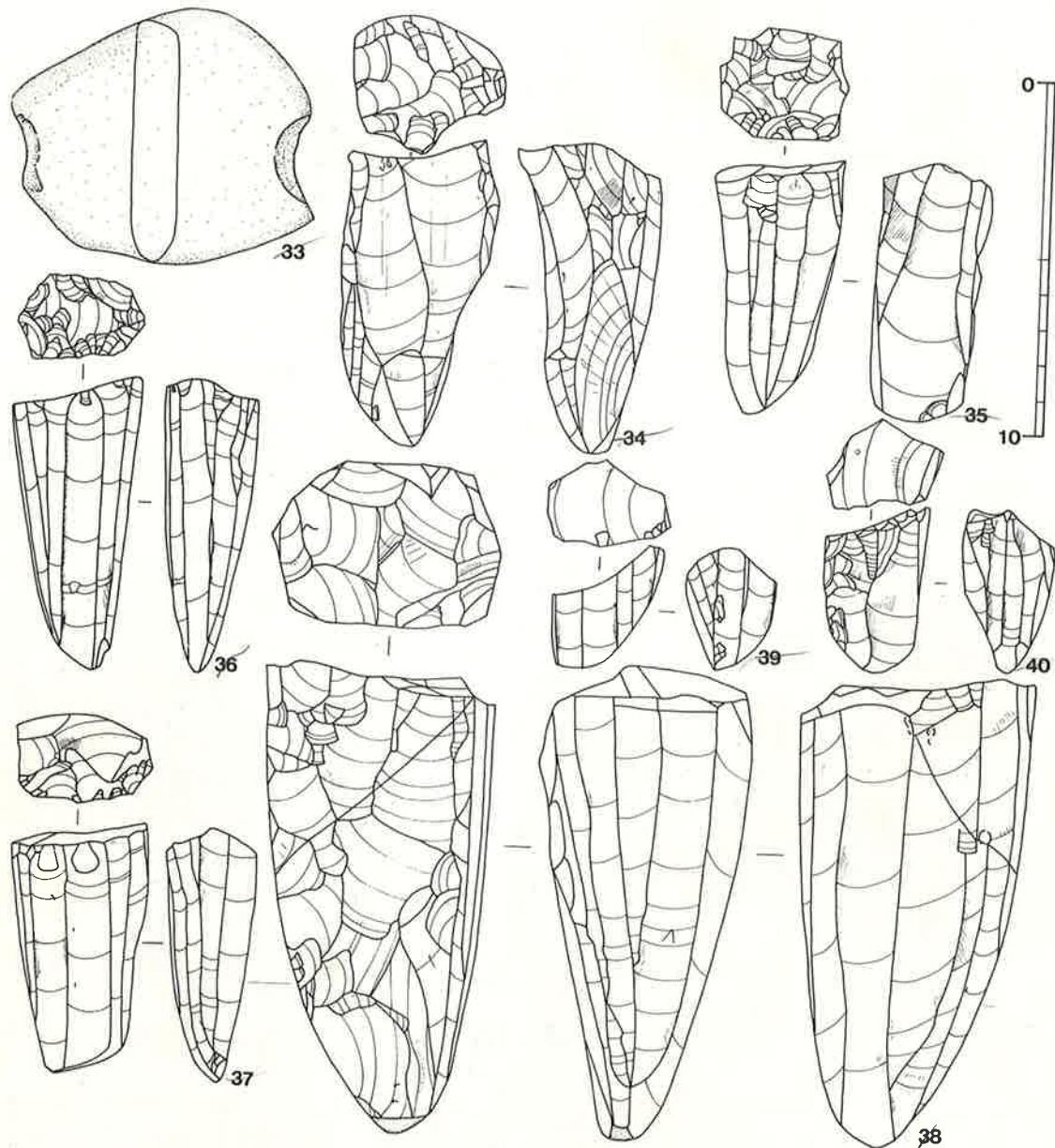


Fig. 4 浦幌新吉野台細石器遺跡出土の石器 (II)

引用文献

- ①後藤秀彦、1974：「底面に貝殻背圧痕文のある土器」(『浦幌町郷土博物館報告』5)
- ②斎藤米太郎、1943：「櫛目紋尖底土器を随伴する細石器遺跡」(『考古学雑誌』33—7)
- ③名取武光、1960：「浦幌新吉野台細石器遺跡」(『北海道文化財』2)
- ④駒井和愛・編、1963：『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』上巻

1974年12月25日	印 刷
1975年 1月 1日	発 行
編 集 後 藤 秀 彦	
発行責任者 野 沢 貞 男	
発行所 浦幌町郷土博物館(089-56)	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地	
印刷所 大同出版紙業株式会社(080)	
北海道帯広市西7条南6丁目	